

ライフスキル教育の効果についての研究(中間報告)

青少年育成支援フォーラム (JIYD)

はじめに

2002年にライオンズ・クエスト『思春期のライフスキル教育プログラム』の普及活動が始まって今年で10年目となります。この間に開催されたライフスキル教育の指導者を養成するワークショップは400回を超え、受講者も10000人に達しました。しかし、プログラムの効果は、ワークショップの開催回数や受講者数の多さだけで評価することはできません。実際に学校でライフスキルの授業が行われ、その授業を受けた子どもたちの態度や行動が好ましい変化を示してこそ意味があるからです。

そこで、プログラム評価の一環として、すでにライオンズクエスト『思春期のライフスキル教育プログラム』を実施している学校、これから実施しようとしている学校の協力を得て、ライフスキルの授業を受けた子どもたちの態度や行動の変化についての調査を3年計画で実施することになりました。これは、昨年度実施したワークショップ受講後約4ヶ月経過者と1年4ヶ月経過者を対象とした『ライフスキル教育指導者養成ワークショップの効果とライフスキル教育の課題に関する調査』と対をなすもので、先の調査がワークショップを受講した教員を対象としているのに対して、今回は生徒が対象となります。

すでに、授業を実施した教員の方々からはライフスキル教育の効果について好意的評価の声をたくさんいただいております。プログラムが効果を持つことは十分に推測できますが、今回の調査により、改めて実際の子どもの態度や行動の変化を確認し、今後プログラムやワークショップの改善につなげてゆきたいと思っております。

調査方法

1 暫定質問紙の作成と第1回の予備調査

今回はライフスキルに関する質問が書かれた用紙に、教室で生徒が回答を書き込む集合調査法(自記式)という質問紙調査で行います。対象は中学生です。そしてそれを補足する意味で、大人から見た子どもたちの変化について知るため、一部の学校については教員と保護者にも協力をお願いし、調査を実施します。

そこで、まずどのような質問がライオンズクエスト『思春期のライフスキル教育プログラム』にもとづくライフスキルの授業の効果をうまく測定することが出来るかを明らかにするために、暫定的な質問紙を作成し、この質問紙を使い1回目の予備調査を実施します。

2 予備調査の分析と本調査用質問紙の作成

次に、予備調査の結果を分析し、質問の内容、項目数、質問の言葉づかいなどが適切であったかどうかを検討し、授業の効果を測定することが十分可能で、かつ質問項目が多すぎず、質問の意図を理解しやすい表現が使われた、回答者に負担の少ない本調査用質問紙を作成します。

3 本調査

続いて、本調査用質問紙を使い、協力校を対象にライフスキルの授業の進展に合わせて

複数回の調査を行います。また一部の学校については教員から見た生徒の変化、保護者から見た子どもの変化を記述してもらう調査も併行して行います。そして、これらの調査結果からライフスキルの授業の効果を評価します。

現在までの進行状況と結果

1 質問紙(暫定版)の作成と調査

ライフスキルとは、私たちが日々の生活の中で出会うさまざまな問題にうまく対処し、自分の持っている力を生かしながら充実した人生を送るための技能(=スキル)の総称です。そしてこの技能は自分や他の人の良さや特長、そして感情を理解したり、自分の思いや考えをうまく表現し、相手と好ましい関係を結んだり、目標を立て、それに向かって自分を励ましたり、心に強い影響を与える問題にぶつかった時、それをしっかりと受け止め前向きに歩んでゆくための知的な能力である心理社会的能力に支えられています。したがって、ライフスキル教育は具体的な事例をテーマに、それに対処するための技能(=スキル)を学ぶことを通して、子どもたちの心理社会的能力を高めることが目的です。

ただし、この心理社会的能力は、読み、書き、計算ができる、知識をたくさん記憶しているというような学力に関わる能力とは異なり、人の態度や行動に関わる能力ですから、テストで簡単に測定・評価できるものではありません。そこで今回の調査では質問紙を使い、子どもたちに態度や行動に関わる自分の能力、あるいは考え方を期間をおいて複数回問うことによって、ライフスキル教育による心理社会的能力向上の効果を推し量ろうというものです。

そこで、まず心理学や教育学で人の態度や行動を測定するためにすでに使われている複数の「心理尺度」と呼ばれるものの中からライオンズ・クエスト『思春期のライフスキル教育プログラム』の目標、授業で学習するスキル、そして高めたい心理社会的能力に関係すると思われる項目を選び出し、45項目からなる暫定的な質問紙を作成しました。

次にこの質問紙がライフスキルの授業の効果を測定することが可能かどうかを確かめるために、2010年3月、すでに2009年4月からライフスキルの授業を実施している2校(埼玉県F中学校、三重県K中学校)、そして2010年度からの実施予定で調査時点ではまだ未実施の2校(長崎県H中学校、新潟県G中学校)の協力を得て、合わせて683名の生徒を対象に調査を行いました。

そして、この調査から得られた結果を因子分析という統計学的手法を用いて、45の質問項目の相互の関連性や、回答に影響を与えている生徒の能力や態度に関わる要素(因子)を選び出しました。また、教員の目から見てライフスキルをよく身に付けていると思われる生徒とそうでない生徒では回答にどのようなちがいがあかなどについても検討しました。

今回因子分析によって選び出されたのは次の5つです。

- 1 他者尊重(「相手の立場に立って考えてみる事が出来る」など)
- 2 コミュニケーション力(「自分の気持ちをきちんと表現できる」など)
- 3 社会・家族の一員(「周りの人に役立つ人間になりたい」など)

4 目標設定(「夢を叶えようと意欲を持っている」など)

5 自己規律(「宿題などやるべきことはやる」など)

そして、これらの因子でくくられる回答項目を比較すると、ライフスキルの実施校では4番目の目標設定に関わる回答項目が高いことが分かりました。しかし、その他の因子については統計学的に差があるとまでは認められませんでした。これらのことから、全体としては5つの因子という観点では十分にライフスキル教育の効果を知ることがむずかしいという結果となりました。

2 本調査用の質問紙の作成

上記の結果を踏まえ、5つの因子という分け方ではなく、プログラムの目標や内容と関わりを勘案して、次の13のカテゴリーに分けて再分析を行いました。

1 目標設定 2 自己統制 3 自省力 4 自己規律 5 他者とのコミュニケーション 6 自己主張性 7 問題解決能力 8 自己肯定 9 家族の一員 10 他者尊重 11 向社会性 12 教師との関係 13 健康意識

その結果、実施群が統計学的に高かったのは、5他者とのコミュニケーション、1目標設定、6自己主張性のカテゴリーで、非実施群の方が高かったのは10他者尊重、2自己統制、3自省力の因子で、その他の7つの因子は有意な差がありませんでした。一方、教師の観点からライフスキルが高いと思われる生徒は、27名と全体の中で小数であったことから、統計学的に差がある(=有意差)とは言えないものもありましたが、得点そのものは他の群に比べて高い結果が出ました。もう少し多くの生徒を対象に調査ができていれば、明らかな差になった可能性があります。

以上の結果から、改めて質問項目とカテゴリーを精査し、質問の表現も、例えば「できる」、「できない」ではなく、「しようと努めている」というような生徒が答えやすく、授業の成果を把握しやすい形に改め、以下の11のカテゴリーで構成される合計30の質問項目からなる質問紙を作成しました。

1 他者尊重 2 自己抑制 3 自己認識 4 他者とのコミュニケーション
5 自己肯定感 6 向社会性 7 家族の一員 8 目標設定 9 学習意欲
10 自己主張性 11 問題解決能力

3 本調査

調査用紙の完成を受けて、2010年度に中学校10校の協力を得て調査を実施しました。第1回は7月、10年度のライフスキルの授業が始まろうとする時期です。第2回は12月、そして第3回は年度末にあたる2011年3月です。

この中でG中学校とH中学校の2校は2010年度からライフスキル教育を開始した学校で、それまでにライフスキル教育は行われていません。その他の学校はすでにライフスキル教育を行っていた学校で、1年生以外は2010年度以前にライフスキルの授業を受けた経験があります。

なお、F中学校の調査対象は1年生のみ、J中学校は2年生のみです。また、J中学校は他校が7月に他校で実施した調査を10月に行い12月調査は実施していません。C中学校も12月調査を実施していません。D中学校は7月と12月のみで3月調査は実施していません。

調査に協力していただいた学校と7月、12月、3月の各調査の回答者数は表1に示しました。この回答者数は、調査対象者数から性別が書かれていないなど質問紙への記入が不十分なものを除外した分析の対象者数です。

表1 調査対象校・調査時期・回答者数

学校	7月(*)			12月			3月		
	1年 男 女	2年 男 女	3年 男 女	1年 男 女	2年 男 女	3年 男 女	1年 男 女	2年 男 女	3年 男 女
A	59 60	65 61	73 48	58 61	66 59	70 48	54 55	63 60	68 47
	119	126	121	119	125	118	109	123	115
B	60 68	66 73	70 63	63 72	64 74	72 68			
	128	139	133	135	138	140			
C	76 82	92 73	59 78				74 78	87 71	62 73
	158	165	137				152	158	135
D	73 95	86 62	86 85	76 80	85 59	85 82			
	168	148	171	156	144	167			
E	38 31	38 27	33 32	38 31	38 25	36 32	38 31	38 25	35 31
	69	65	65	69	63	68	69	63	66
F	10 27	- -	-	11 29			10 29		
	37			40			39		
G	55 51	50 53	44 49	57 53	51 54	45 51	56 52	53 52	45 50
	106	103	93	110	105	96	108	105	95
H	33 37	47 49	35 39	34 37	47 49	35 40	33 37	45 49	35 39
	70	96	74	71	96	75	70	94	74
I	6 15	18 6	24 15	6 14	18 7	24 15	6 16	18 7	23 16
	21	24	39	20	25	39	22	25	39
J		122 132						104 114	
		254						218	
合計	410 466	584 536	424 409	343 377	369 327	367 336	271 298	408 378	268 256
	876	1120	833	720	696	703	569	786	524

(*Jは10月)

結果1 全体傾向

実際にライフスキルの授業の効果进行调查を行うにあたっていくつか明らかにしておかなければならないことがあります。まず第1はライフスキルに関わる行動や態度の“実態”です。ライフスキルは心理社会的能力と深く結びついていますので、性(男女)や発達段階、そして集団の質に強く影響されることが予想されます。つまり、男女で異なる可能性、年齢が上になるにしたがって必ず向上するというものとは言えない可能性、そして集団によって結果が異なる可能性があります。

そこでまず、大まかな傾向をつかむために、9校を対象とした7月調査のすべてのデータをひとまとめにして分析しました。その結果性別では男子が高かったのは「自己肯定感」と「自己主張性」の2つのカテゴリーのみで、他の9つのカテゴリーはすべて女子の方が高いという結果が出ました。また、学年を比較すると、1年生が最も高く、2年生はすべてのカテゴリーで1年生を下回り、3年生は多くのカテゴリーが2年を上回ったものの、どれも1年生のレベルまでは届いていませんでした。このことは思春期の心理的発達が態度や行動としては必ずしもポジティブな変化として現れていないことを示唆しています。

次に学校ごとにまとめて比べると、性別や学年別の傾向は同じですが、学校間には若干の差がありました。以上のことから、ライフスキルの授業の評価にあたっては性や子どもたちの心理的発達を十分勘案して評価すべきこと、そして変化に関しては学校差を考慮すべきことが分かりました。

結果2 ライフスキルの実態

結果1でライフスキルに関する態度や行動の性差、発達段階の差など大まかな傾向が分かりましたので、それらを再確認するとともに、発達段階(学年)によって何が変化するか、また自己評価(生徒が回答した評価得点)の高い者と、低い者とは何がどうちがうのか等について詳しく検討するために2009年度までライフスキル教育を実施していなかったG中学校(1年生：男55女51計106、2年生：男50女53計103、3年生：男44女49計93)とH飯盛中学校(1年生：男33女37計70、2年生：男47女49計96、3年生：男35女39計74)の2校について分析を行いました。この2校を選んだのはライフスキル教育の影響が出ていない状況を正確に把握するためです。両校合わせて回答者数は1年生：男88女88計176、2年生：男97女102計199、3年生：男79女88計167です。

まず、図1は質問に対する5段階の自己評価を、「当てはまる」を5点、「どちらかと言えば当てはまる」を4点、「どちらとも言えない」を3点、「どちらかといえば当てはまらない」を2点、「当てはまらない」を1点というふうに変換し、集団の平均値を学年別、男女別に示したものです。5に近いほどその集団に自己評価が高い者が多く、1に近いほど自己評価が低い者が多い傾向を表しています。項目間の違いを視覚的に把握しやすくするためにあえて折れ線グラフで示しています。

男女ともQ26「アルコール、たばこ、その他の薬物などをすすめられたとき断ることが

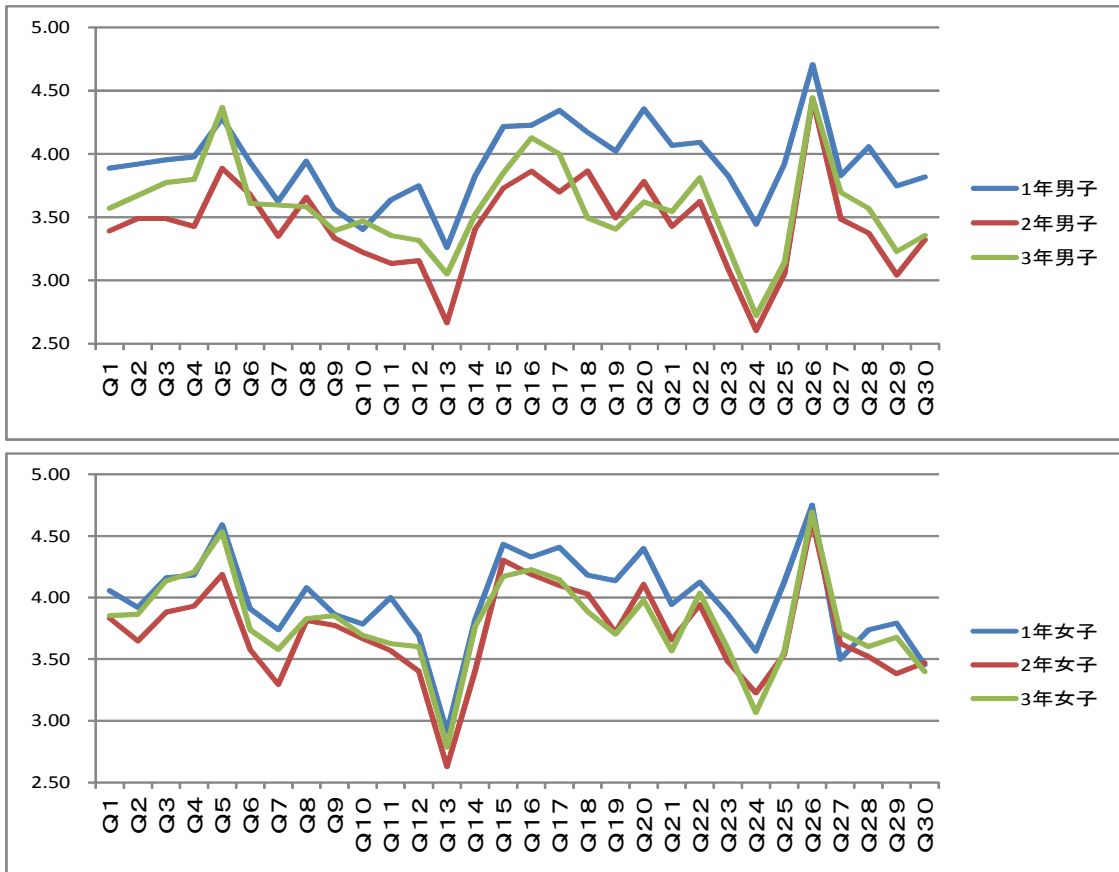


図1 男女別・学年別・項目別自己評価

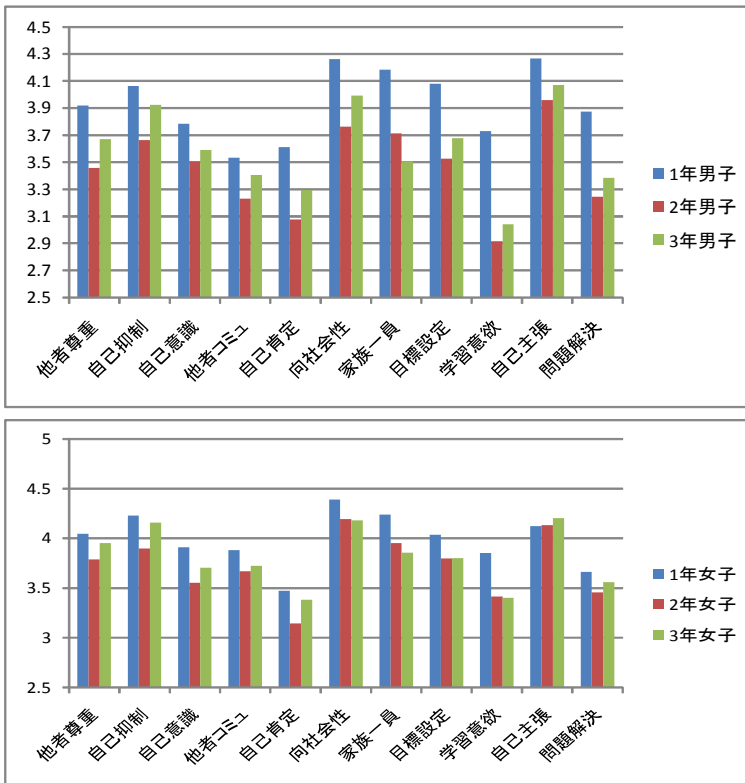


図2 男女別・学年別・カテゴリー別自己評価

できる」がどの学年も高く、Q5「法律や規則に違反するようなことはしていない」のとりがり具合も目立っています。

一方低い方では Q13「今の自分が好きだ」と Q24「家庭でも進ん勉強することができる」の2項目の低さが男女とも目立ちます。また、全体として Q7 あたりから Q13 にかけてやや低く、Q15 から Q22 にかけてやや高い傾向があることが分かります。

このやや低い部分、やや高い部分が何かを知るために、30の質問項目を11のカテゴリーにまとめて表し

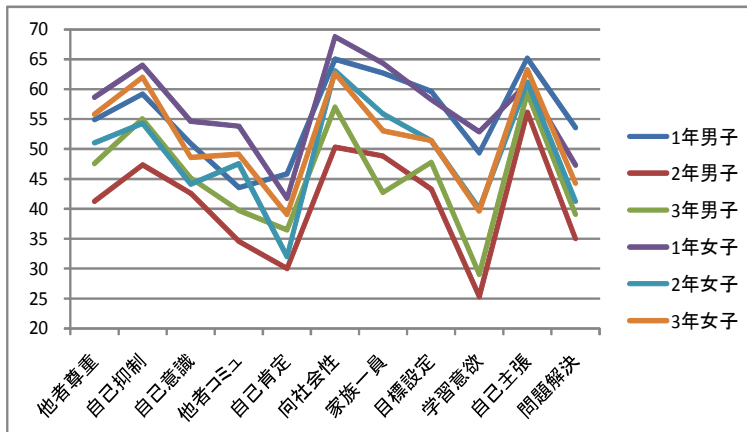


図3 男女別・学年別・因子別自己評価偏差値

たのが図2です。全体として男女とも1年生が高く2年で大きく下がり、3年で回復というパターンが確認されます。そして「自己肯定感」や「学習意欲」に関わるカテゴリーが特に2年で大きく低下しています。また「他者とのコミュニケーション」や「問題解決」に関する自己評価も全体の中では低い傾向にあります。

図3は男女・学年を総合して、各カテゴリーを偏差値として表したものです。偏差値とは比較しやすいよう平均点が50点になるよう調整した値で60以上はかなり高く、40未満はかなり低いことを意味しています。

全体として見ると、「向社会性」と「自己主張性」は学年差はあるものの全学年平均以上です。それに対して、「自己肯定感」は全学年平均以下になっています。また、「学習意欲」の1年生から2年生への低下が顕著です。

この調査を行った7月段階では、1年生は小学校を卒業したばかりで、まだ中学校式の学習をあまり経験していません。それがテストを中心とした中学校式の学習経験を重ねていくうちに、学習意欲の低下という結果を招いているのかも分かりません。

また、思春期になると自分のことがよく分かってきて、同時に周りのことも見えてきます。その結果過剰に不安や劣等感を抱くことが少なくありません。このことが自己肯定感に関わる項目の評価が低い結果を導いていることが考えられます。いずれにしろ、人生を自信を持って生きてゆくために重要な「自己肯定感」が低く、「学習意欲」が2年生で大きく低下していることはとても気がかりな点です。このあたりにライフスキル教育が果たすべき重要な課題が潜んでいると言えるかもしれません。

結果3 ライフスキルに関する自己評価の個人差

これまでライフスキルに関わる態度や行動の自己評価を学年や男女でまとめて集団の平均という指標で見て来ました。しかし、当然その集団に所属する者がみなよく似ている、すなわち平均に近い結果を示しているというわけではありません。平均は平均として、どの集団にも高い自己評価をした者と、逆に低い自己評価をした者が混在しています。そこで、そのあたりの構成はどうなっているのか、また自己評価の高い者と低い集団者にはどのようなちがいがあのかについて検討しました。使ったデータは同じく先の2校の7月の調査結果です。

まず、学年別男女別に個人の自己評価の総合得点を偏差値として計算し、それぞれの集団の中で偏差値60以上を高値群、そして40以下を低値群とし、残りを中位群としました。

結果1でも示しましたが、偏差値で表すと平均が50となり、プラスマイナス10、つまり偏差値40から60の間に大勢の

表2 高値、中間、低値群別自己評価

	1年男子		2年男子		3年男子		1年女子		2年女子		3年女子	
	人数	平均	人数	平均	人数	平均	人数	平均	人数	平均	人数	平均
高値群	14	4.73	17	4.21	10	4.37	14	4.64	17	4.46	13	4.51
中位群	58	3.98	65	3.46	56	3.63	70	4.04	65	3.74	62	3.82
低値群	16	3.02	15	2.46	13	2.74	14	3.07	20	3.01	13	3.02
合計	88		97		79		98		102		88	

者が入り、40以下には小数の低い者、60以上には小数の高い者が入ることが分かっています。今回の対象者を偏差値で分類したものが表2です。

次に、学年別、性別に高値群、中位群、低値群の項目別平均値を求めました。その結果を1年生についてグラフにしたものが図4です。

高値群は、全項目にわたって高い平均値を示しているのと対照的に、低値群はすべての項目で高値群、中位群を下回っているのと同時に、項目間のばらつきが大きいことが分かります。男子では特に自己認識に関わるカテゴリーに属するQ7「自分の個性や特長が分かる」、Q8「自分の感情(怒っている、悲しいなど)を冷静に捉えることができる」や、コミュニケーション能力に関わるカテゴリーに属するQ9「友だちに時分の考えを打ち明けたとき、きちんと表現できる」、Q10「人と話していて、あまり会話が途切れない方だ」、そして自己肯定感に関わるカテゴリーに属するQ13「今の自分が好きだ」、Q14「自分の健康を考えて、行動したり判断したりすることができる」の低さが目立っています。

またQ24「家庭でも進んで勉強することができる」やQ30「問題にぶつかったとき、ど

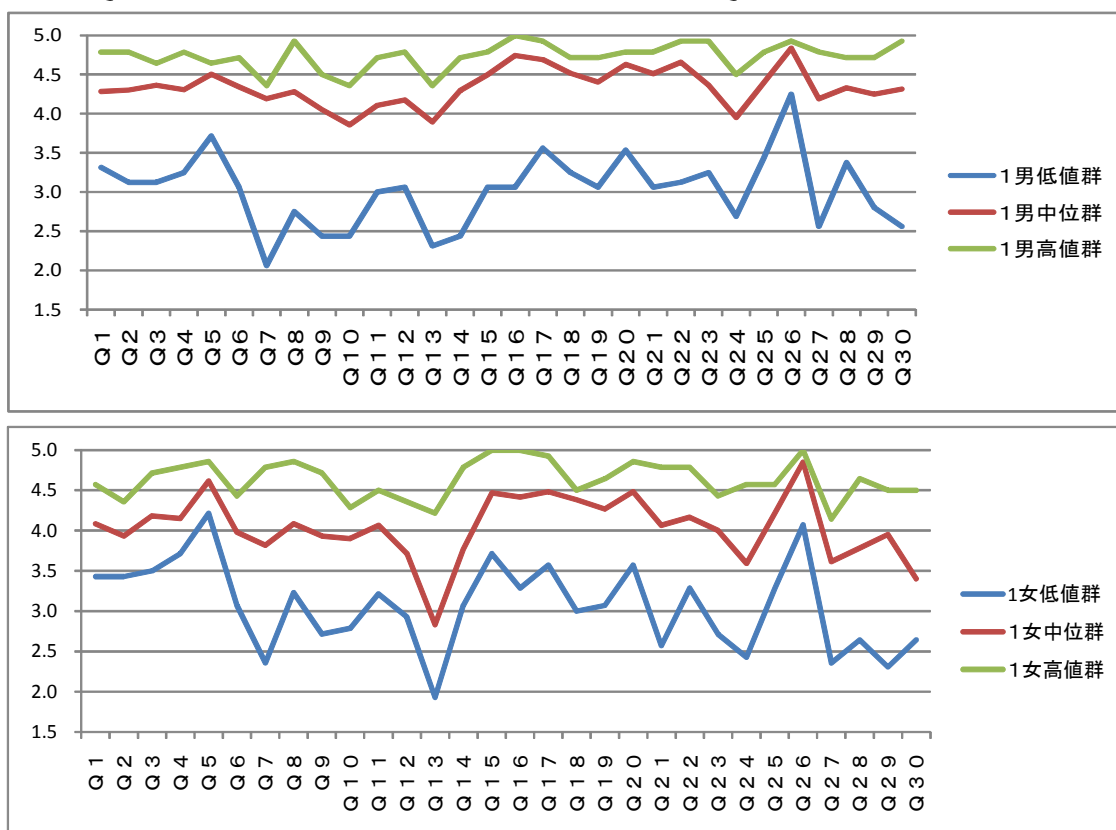


図4 1年生男女別高値、中位、低値群別自己評価

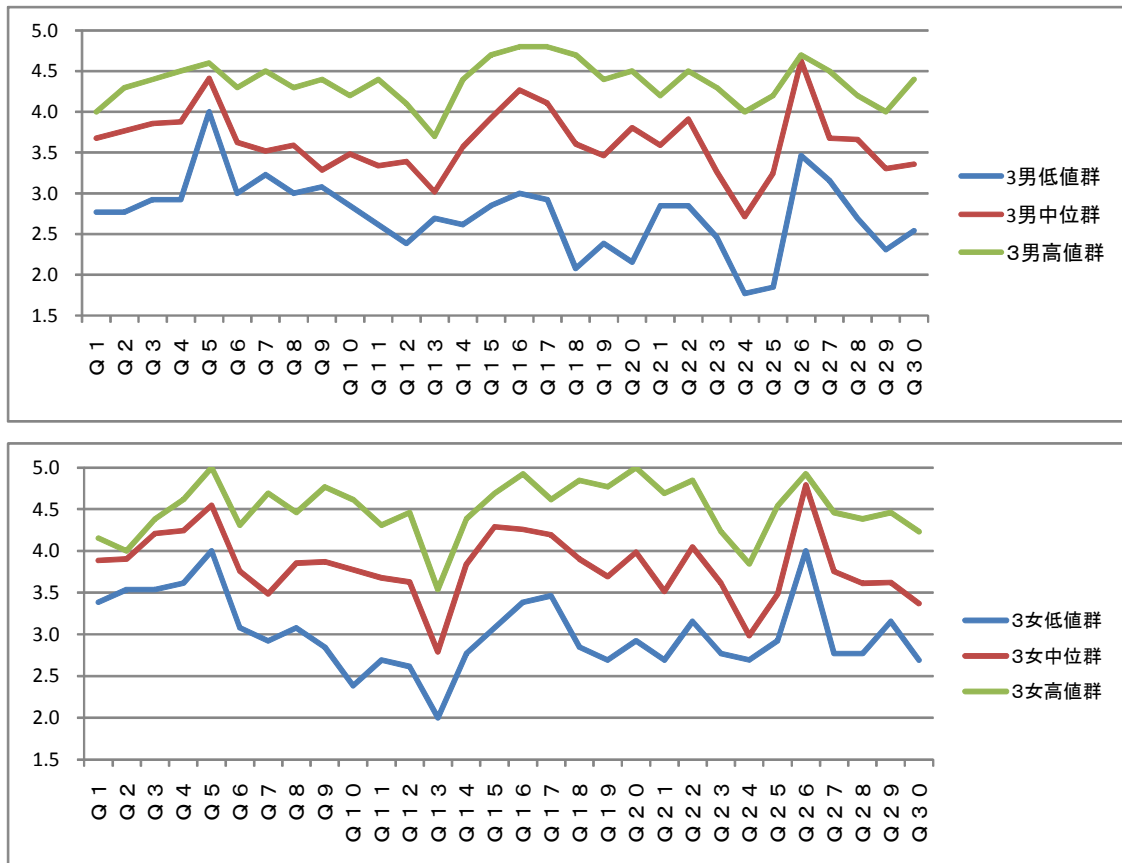


図5 3年生男女別高値、中位、低値群別自己評価

ちらかという物事を前向きに考えることの方が多い」も高値群に比べて著しく低くなっています。

女子も同じ傾向ですが、Q21 自分の目標や夢をかなえようと意欲に燃えている、Q28 困った問題にぶつかったとき、いろんな解決方法を考えることができる、Q29 必要なときには、先生や家族など、信頼できる大人に相談することができるが高値群に比べて低くなっています。

図5は3年生について群別にグラフにしたものです。高値群は1年生と同様にすべての項目で他群を上回っていますが、やや項目間のばらつきが見えます。また、平均値は全体として下がっていて、特にQ13の「今の自分が好きだ」は大きく落ち込んでいます。中位群も1年生よりは全体的にかなり低くなっています。低値群は他群に比べて項目間のばらつきが大きく、グラフの左側よりも右側のQ18からQ20の家族の一員に関わる因子とQ24、Q25の学習意欲に関わる因子が大きく落ち込んでいます。特に男子はこの傾向が顕著です。女子ではQ12からQ14の自己肯定感に関わるカテゴリーの落ち込みが男子より大きくなっています。

男女とも群別のパターンはよく似ています。特に自己肯定感や学習意欲の低さは共通です。ただし、高値群と低値群の差は女子が男子に比べて少ないのが特長です。

図6は3年生について、高値群の項目別平均値に対して、中位群、低値群がどの程度低い平均値を示したかを%で表したグラフです。100であれば高値群と平均値が同じ、50であれば平均値は高値群の半分ということです。

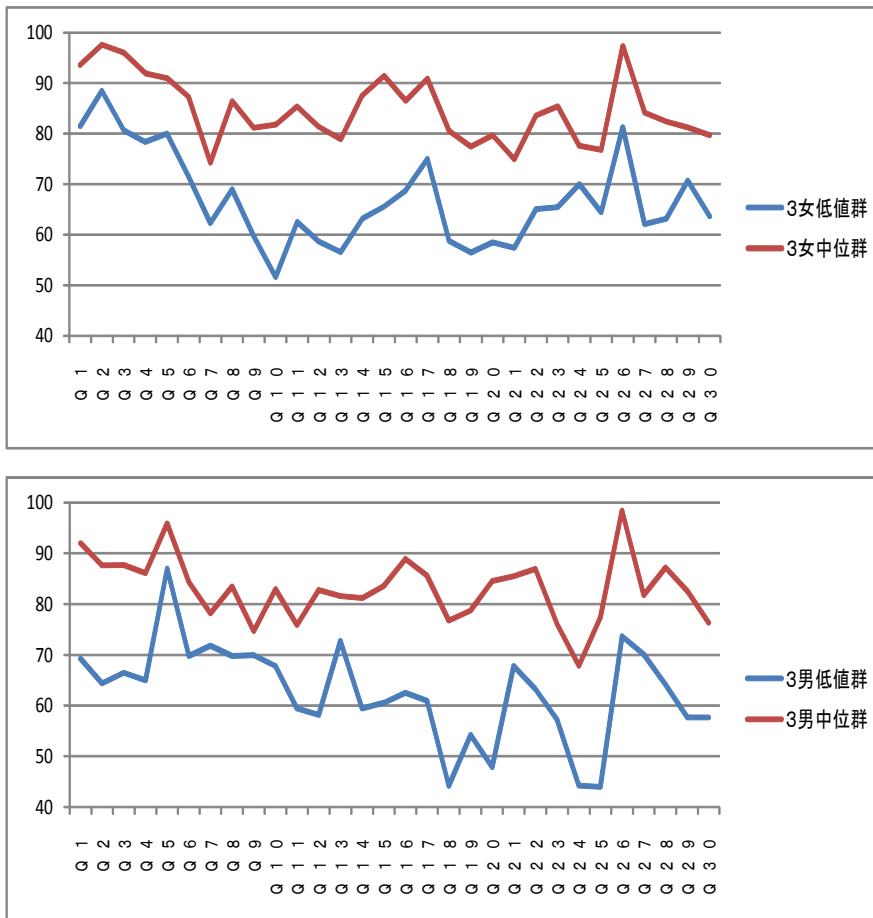


図6 3年生男女別中位群、低値群の高値群に対する評価割合(%)

まず、女子のグラフを見ると、低値群が高値群の60%以下になったのは、Q10「人と話してあまり会話が途切れない方だ」、Q12「学校では多くの友だちが自分を認めてくれている」、Q13「今の自分が好きだ」、Q18「家族と一緒にいると楽しい」、Q19「家族の一員として、責任を果たしている」、Q20「家族のために、できるだけことはしてあげたいと思う」、Q21「自

分の目標や夢を叶えようと意欲に燃えている」の、コミュニケーション、自己肯定感、家族の一員に関わるカテゴリーですが、50%以下になっているものはありません。

これに対して男子の低値群では Q18、Q20 と、Q24「家庭でも進んで勉強することができる」、Q25「部活や通学などで疲れていても、宿題などやるべきことはできる」が高値群の50%以下となっていて、Q19 と、Q23「試験前など自分が実行できるような具体的な目標や計画を立てることができる」、Q29「必要なときには、先生や家族など、信頼できる大人に相談することができる」、Q30「問題にぶつかったとき、どちらかという物事を前向きに考えることの方が多い」の家族の一員、学習意欲、問題解決に関わるカテゴリーが60%以下になるなど、女子と比べて高値群と低値群の差が大きいことを示しています。

低値群の男女を比べると、男女とも高値群に対して「家族の一員」のカテゴリーの格差が大いに加えて、女子では「自己認識」、「他者とのコミュニケーション」のカテゴリー、男子は「学習意欲」のカテゴリーでの格差が大きくなっています。

中位群については低値群とよく似た傾向は示しながらも、項目間の差は男女とも低値群ほど大きくはありません。

結果 4 既実施校でのライフスキルに関する自己評価の変化

この評価事業は 2009 年から質問紙の作成を始め、2010 年度から 2012 年度までの 3 年間に授業評価の期間としています。したがって本格的な調査結果の分析は 2012 年終了時点となりますが、すでに 1 年が終了していることもあり、2010 年度以前からライフスキル教育を実施していた 8 校のうち、1 年生のみの調査である F 中学校、2 年生のみの調査である J 中学校、そして 3 月の調査データがない D 中学校、B 中学校を除いた A 中学校、C 中学校、E 中学校、I 中学校の 4 校について、7 月実施の評価と 3 月実施の評価を比較分析を行いました。

7 月および 3 月の学校別・学年別・男女別回答者数は表 3 に示しました。7 月調査と 3

表 3 4校調査時期と回答者数

学 校	7 月			3 月		
	1 年 男 女	2 年 男 女	3 年 男 女	1 年 男 女	2 年 男 女	3 年 男 女
A	59 60	65 61	73 48	54 55	63 60	68 47
	119	126	121	109	123	115
C	76 82	92 73	59 78	74 78	87 71	62 73
	158	165	137	152	158	135
E	38 31	38 27	33 32	38 31	38 25	35 31
	69	65	65	69	63	66
I	6 15	18 6	24 15	6 16	18 7	23 16
	21	24	39	22	25	39
合 計	179 188	213 167	189 173	172 180	206 163	188 167
	367	380	362	352	369	355

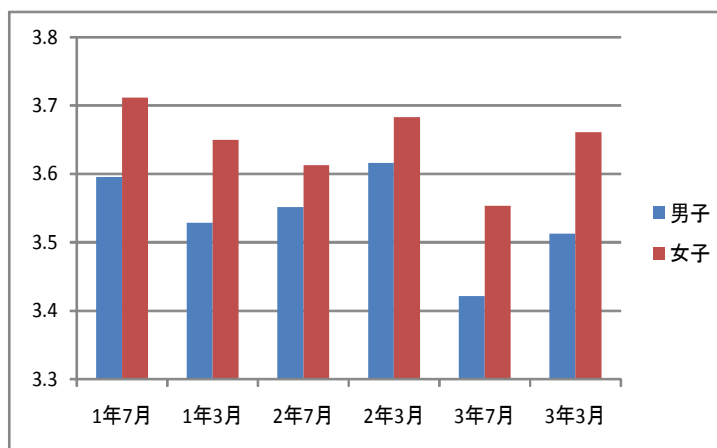


図 8 学年別・男女別自己評価平均得点 (7月と3月)

月調査では回答者数が若干異なりますが、大多数の生徒が両方の調査に回答していることから、一方だけの回答者を省かずに分析を行いました。その結果が図 8 です。

どの値も女子が男子を上回っていますが、注目点は男女 3 月調査の 2 年生の高さです。先に紹介した未実施校 2 校では 1 年がずば抜けて高く、2 年で大きく下がり、3 年で回復するものもあるものの、1 年生のレベルには届かないというのが結果でしたが、既実施校 4 校を見ると、男女とも 3 月時点で 2 年生は 1 年生を上回る結果となっています。また学年間の差も未実施校ほど大きくありません。

図 9 と 10 は学年別自己評価の各項目別平均値をグラフに表したものです。7 月に比べて 3 月は明らかに学年差がちぢまり、また Q13、Q24 の落ち込みとぼらつきが小さくなっています。

学校ではさまざまな教育活動を行ってることに加えて、ライフスキル教育に充てる時間、取り上げる授業テーマも各校それぞれに異なっています。したがって、もう少し詳細に分析しなければなりません。現時点の結果はライフスキル教育が何らかの好ましい影響を与えている可能性を示唆しています。

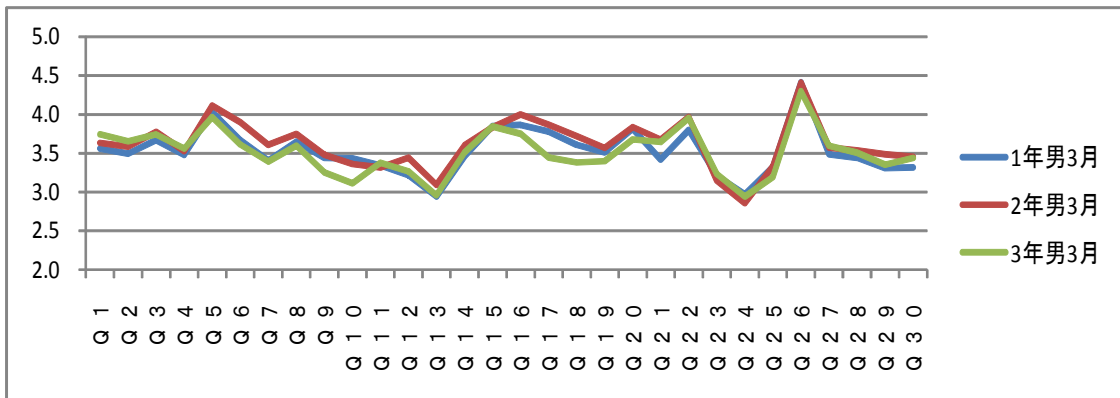
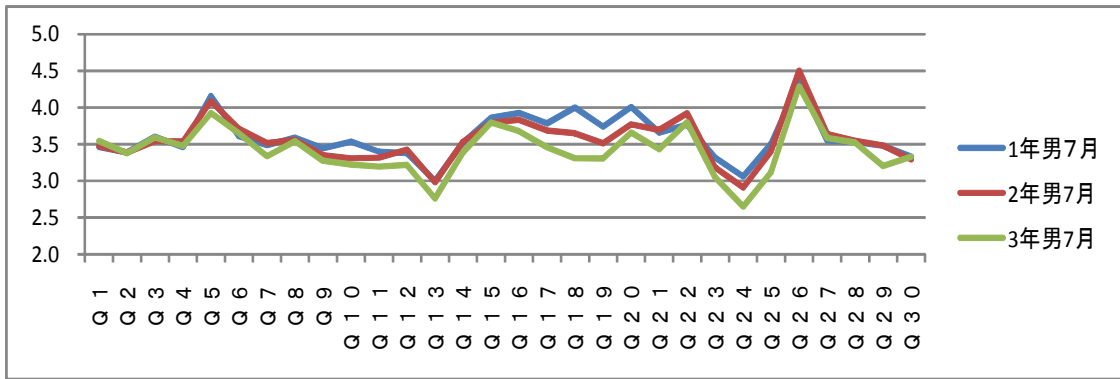


図9 学年別男子自己評価(7月、3月)

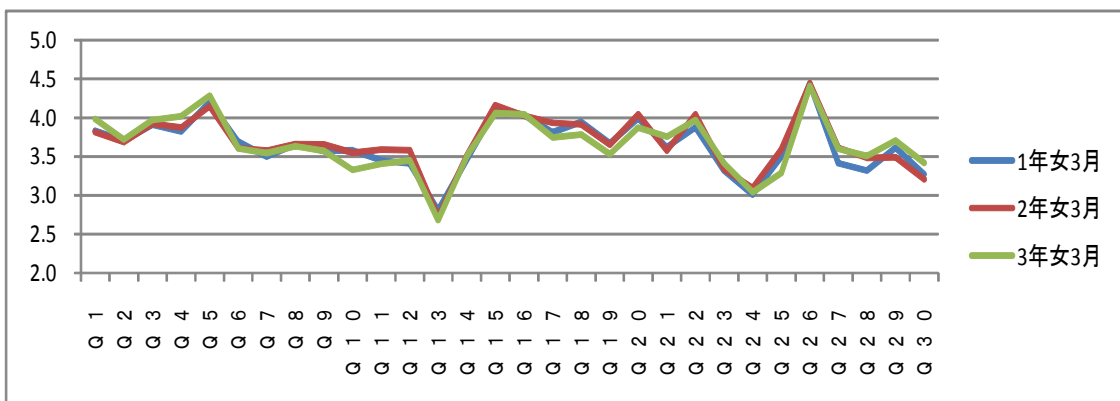
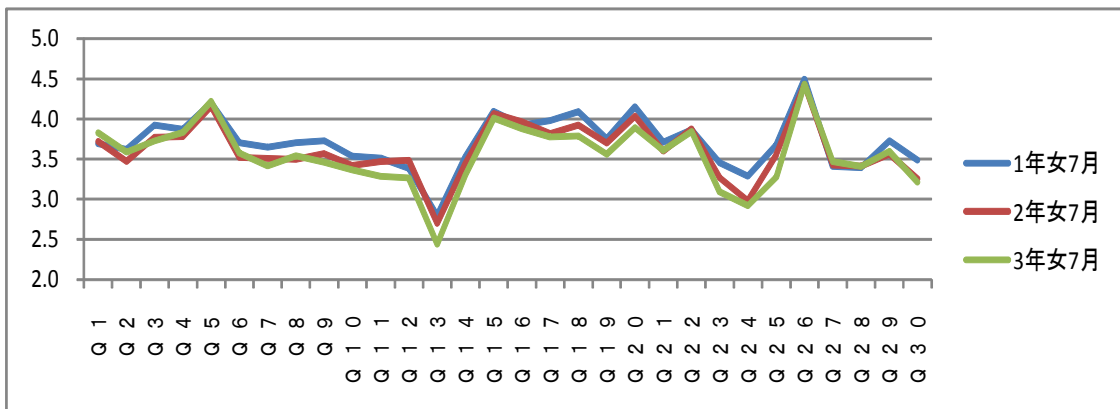


図10 学年別女子自己評価(7月、3月)

まとめと考察

未実施校においてはライフスキルに関する行動の自己評価は、集団としてみると男女とも1年生から2年生へ大きく低下し、3年生でやや回復する傾向があることが分かりました。項目別では「自己肯定感」や「学習意欲」の категорияに属する項目は1年生時点から他項目に比べて低く、2年、3年ではさらに低下していました。

一方、同じ集団内で自己評価の高い群と、自己評価の低い群を比較すると、前者は項目間の差が少ないのに対して、後者は項目間の差が大きく、先の「自己肯定感」と「学習意欲」に加えて、「他者とのコミュニケーション」や「家族の一員」、「問題解決」などのカテゴリーで自己評価の高い群と大きな差があることが分かりました。

これらのことは、ライフスキルに関わる態度や行動には思春期という発達段階の心理的要因に加えて、それ以外の要因が強く関わっていることを示唆しています。

自己評価の低い群で見られる格差の大きい項目である自己肯定感や学習意欲、そして他者とのコミュニケーション、家族との絆、問題解決などは、ライオンズクエスト『思春期のライフスキル教育プログラム』が主たるテーマとしているところであり、ライフスキルの授業という教育的介入によって自己評価の低い群にどのような変化が現れるのか、今後の調査で大いに注目してゆきたいと思います。

またすでにライフスキル教育を実施している学校4校について7月の調査データと翌年3月の調査データを比較した結果、学年の差が小さく、また2年生の自己評価が大きく改善されていることが分かりました。現時点でこれがライフスキル教育の成果であると断定はできませんが、実施校の生徒の自己評価の結果はライフスキル教育を実施していない学校とは異なるパターンとなる可能性を示しています。

ライフスキルに関わる態度や行動の自己評価は決して一律ではありません。もし自己評価の低い群の特に低い数項目が改善されると、集団全体の評価も改善されることとなります。多くの研究結果から、ライフスキルを支える心理社会的な能力は社会の一員として責任を持ち、個性を大切にしながら豊かな人生を送るための重要な要素であることが分かっています。支援が必要な子どもたちにライフスキル教育の効果が十分に届くよう、一層のライフスキル教育の普及を図るとともに、本年度(2011年)の調査結果を待ち、さらなる分析をすすめていきたいと思います。

調査者 荻野美佐子 上智大学総合人間科学部心理学科教授
北山 敏和 ライオンズクエスト講師

本調査は、ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会より費用の一部をご支援いただき実施しています。